

---

# とある軍オタの鋼鉄戦記

猛獣戦車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある軍オタの鋼鉄戦記

### 【Nコード】

N18830

### 【作者名】

猛獣戦車

### 【あらすじ】

柄にもないことをしたばかりに、あっさりと死んでしまった軍事オタクの大学生、黒川徹平。ところが、神様が行っていたキャンペーンに当選したことで、好きな世界に転生できる権利を得ることに。希望したチートな能力を貰ってゲームであるメタルサーガの世界に転生した徹平の鋼鉄戦記は、果たしてどのようにつづられていくことになるのだろうか。いわゆるチートな主人公最強系、ご都合主義万歳の二次創作小説です。そういったものが苦手な方は読まない方がいいと思われますが、気にせず読んでくれる方は感想

とともに大歓迎します。

## プロローグ

「ここは……どこなんだ？」

意識が戻ってたつぷり数十秒考えた挙句に放った言葉は、まったく情けないほど漠然とした内容だった。

「家……なわけないよなあ」

俺は本当に途方に暮れていた　なにしろ自分が今立っている空間は、全面真っ白な部屋なのだ。いや、部屋かどうかわからない。上下左右全てが真っ白で、まるで距離感がつかめないのだ。

もしも俺を見ている誰かがいるのなら、その誰かは長身で眼鏡をかけていて、ちょっと目つきが鋭い以外は実に普通な顔をした、平均的な日本人男性を見ていることだろう。もっとも今はただでさえ悪い目つきが、困惑のせいでさらに悪くなっているに違いないが。

「落ち着け俺、何があつたかよく考えるんだ」

ぼさぼさの黒髪をさらに手でかき乱しながら、自分に言い聞かせるために、わざと声に出して言う。陳腐な自己暗示のひとつだが、しないよりはずっとマシだ。

そう、俺の名前は黒川徹平、私立大学に通うどこにでもいる存在で　それがどうして、こんな意味のわからない場所にいるんだ？

「最後に憶えているのは……」

いつものお気楽な休日、俺は早速本屋に行って楽しみにしていた最新版の陸軍兵器図鑑を購入して、上機嫌で帰路を歩んでいたはずだ。

言い忘れていたが、俺は世間で言われるところの軍事オタク、略して軍オタという生命体らしい。正直オタクという言葉は、差別用語みたいであり好きではない。男の子が戦車や銃に憧れ、それを熱心に調べる行為を、オタクなどという俗語で呼ばれるのは実に我慢ならない。最初にこの名称を思いついた奴には、是非とも大陸間弾道弾をぶち込んでやりたいものだ。

「いかにいかに、そんなことで怒っている場合ではない。さっさと続きを思い出すんだ俺！」

急いで頭を振って邪惡な思考を振り払い、再び脳内から記憶を採掘する作業に戻る。

お目当ての本を手に入れ、ルンルン気分で歩いていく俺だが、ふと道端に落ちている空き缶に気づいた。まったく世の中にはポイ捨てをする不逞の輩が多くていけない。ここは今とても機嫌のいい俺が拾ってちゃんと捨ててやろう。

上機嫌の俺は普段ならしないであろう空き缶拾いをしようと、屈んで

「俺、トラックに跳ねられた……？」

猛烈なエンジン音に驚いて顔をあげた俺の視界を占領したのは、自分へと突撃して来る大型トラック　ブラックアウト。

「それで起きたらこの有様、というわけか……ここはあの世なのか、はたまた本当の俺は意識不明の重体でここは夢の中なのか」

つくづく意味がわからない。理解できない。自分が生きているのか死んでいるのかすらわからないなんて、馬鹿げている。

『よし、我が教えてやろう。お主は死んだのじゃ！』

「はあ……！？」

いきなりやたら偉そうな響きを伴った死亡宣告が響いて来て、俺は死ぬほど驚いた。いや、本当に死んでいるとしたら、これは笑えない比喩だ。

『だから、お主は死んだのじゃ。邪な物が捨てた空き缶を拾うとしたところを、居眠り運転の大型トラックに……これ以上は残酷過ぎるから控えるが、とにかくお主は死んでしまったぞ』

そりゃまあ、大型トラックにサンドイッチされた状況を具体的に話されても、聞くに堪えないスプラッタ話になるだけだもんな。

「えっと、今俺に話しかけているのは、どちら様で？」

周囲を見渡しても相変わらず真っ白な世界、俺に話しかけて来ている人物の姿は影も形も見えない。というよりも、なんか直接頭の中に響いて来ているように感じる。

『我はいわゆる神様じゃな。ついでに言うと、ここは天界への一歩手前の場所じゃ』

「あー……うん、俺は天国と地獄、どちらに送られるんでしょうか？」

『おお、ずいぶんと素直な反応じゃな！今までの連中は現実逃避してばかりだったのじゃが……まあよい』

だよなあ、普通はこんなこと言われたらパニック起こすか、現実逃避するかだよな……俺はなんというか、どう考えてもあの状況で助かったとは思えないし、それにこの状況を説明できるわけでもないで、この神様の言うことを信じるしかないだけなのだが。たぶんある種の開き直りだろう。

『お主は天国じゃな』

やったーって死んだのに喜ぶことなのだろうか、これは。

『と言うはずだったのじゃが、お主はラッキーじゃぞ。今天界でキヤンペーン中でな、なんと善い行いをして死んだ者の中から、抽選で好きな世界に転生させる豪華特典にお主は大当たりしたのじゃ！』

なにそれどういことなの。

『今言った通りじゃぞ。早い話がお主は二度目の人生を手に入れたのだな』

「マジですか……！」

最初は実感がわかずただ困惑するばかりだったが、二度目の人生、しかも好きな世界に転生できると聞き、だんだんとテンションが上昇して来た。

『ああ、本当じゃ。神の名に於いて嘘は言わんぞ!』

神様から太鼓判を押されたぞ。どうやら俺の転生フラグは今完全に成立したらしい。

「ところで神様、どうして先程から姿をお見せにならないのでしょうか？」

湧き上がる喜びに圧倒される前に、ふと疑問に思ったことを質問してみた。自分を転生させてくれる大事な神様ということで、口調がやたら丁寧になってしまった。

『ん？ああ、別に大した意味は無い。姿を見せてもよいのじゃが、イメージと違うなどと苦情を言う輩がおつてのう、やめにしたのじや』

うつむ、神様のイメージを打ち砕く神様とは、いかような姿なのか。さらに疑問が深まったが、まあそんなことはやっぱりどうでもいい！

「本当にどんな世界にでも転生できるのですか？」

『もちろんじゃ。美少女だらけのハーレムで魔法な世界から、核戦争後の荒廃したアメリカな世界まで、何から何までどんと来いじや!』

すごいな神様、さすが神様！

『ほれほれ、どんな世界でもいいから転生先を希望するがいい。今



ならお主の望む能力も付与してやってもいいぞ」

なんと能力まで……ここまで来ると、逆に頭が冷静になるというものだ。俺は落ち着いて転生先の世界と、そして神様にお願いする能力を考えてみることにした。

じっくりと考えて結論を出した俺は、神様に確認をとるために声を出した。

「神様、転生先の世界はゲームの世界でも大丈夫ですか？」

『全然問題ないぞ。さあ、遠慮なく申すが良い』

「では、メタルサーガ というゲームの世界に転生させてください」

『ふむ……どういうゲームなのか、ちと教えてくれんかのう。こちらで調べてもいいが、万が一別の作品と間違えたら、目も当てられないから』

「わかりました、では今からお話しますね」

俺は早速、メタルサーガ の世界観と概要を話し始めた

さまざまな技術が発達し、人類の栄華が極められた近未来。人類は環境問題に悩まされながらも、満ち足りた繁栄を送っていた。ところが、盛者必衰という仏教用語に示される通り、世の中には永遠に絶対にといった言葉は通用しないのだ。

人類はその叡智を結集して環境問題を解決して地球を救うべく、  
ノア という名を持つ巨大電子頭脳を完成させた。しかし皮肉な  
ことに ノア の出した地球を救う方法とは、全ての環境破壊の原  
因である人類を抹殺するという、とんでもないものだった。

ノア はその与えられた知能と権限をフル活用して、人類に牙  
を剥いた。ありとあらゆる電子機器は狂い、軍隊は彼らの盾となり  
矛となるはずであった自律兵器に虐殺され、拳銃の果てには核ミサ  
イルや生物兵器が放たれる始末。

結局、文明に依存しきっていた人類が ノア の生み出した兵器  
やモンスターに敵うはずもなく、ここに人類の栄華はもろくも崩れ  
去った。後世で言うところの 大破壊 の真実とはこういうことだ  
った。

しかし、人類もまたしぶとかった。僅かながらも世界中で生き残  
った人類は、大破壊 の記憶を薄れさせながらも ノア の脅威  
と戦い続けた。ノア の生み出したモンスターと幾度も死闘を交  
えながら、人類は村や町といった生存拠点を築いて団結し、生き延  
び続けた。

ひとまずの余裕を得た人々の中には、ノア により押しつけら  
れた運命に逆らうが如く、モンスターとの戦闘を生業とする職業を  
生み出した。大破壊 前の主力陸戦兵器である戦車に乗り込み、  
その強力な火力を持ってして、地上を闊歩し空を支配するモンス  
ターどもをなぎ倒す、情け容赦無い賞金稼ぎ。さらなる高性能な武器  
や戦車を求め、モンスターの跋扈する廃墟をさすらう冒険家。

人々は彼らを意見の念を込めてこう呼んだ ハンター、と。

大破壊 という災禍をもたらした ノア 自体は、とある凄腕のハンターによって破壊されたが、かといってそれで全世界のモンスターが消えたわけではなかった。大破壊 の傷跡は未だに癒えることはなく、世界にさまざまな悲劇と恐怖を量産し続けていた

「主人公はそんな荒廃した世界の象徴であるハンターとなり、モンスターと闘いながら旅をしていく、というゲームです」

そこで俺は メタルサーガ の説明を終えた。

『こちらでも調べてみたが、確かにお主の説明通りの、これはなかなかシリアスな世界だのう。本当にこのゲームの世界でよいのか？』

神様が一体どうやって一瞬で メタルサーガ の内容を確認したのかは不明だが、まあだからこそその神様なのだろう、と無理やり納得することにしてから、俺は答えた。

「はい、問題無しです。それでその世界で生きるためにも、いくつかの能力をお願いしたいです」

俺はかなり欲張り、とんでもない能力をいくつも要求したが、神様はそれを聞いてもさして考えた様子も無くすぐに返事をくれた。

『よいだろう、この程度の能力は神にとっては造作の無いこと。せっかくのキャンペーン当選者じゃ、出血大サービスをしてやろうぞ』

「ありがとうございます、神様！」

正直無茶苦茶な能力ばかりだったので、却下されてしまったら別の平和な世界に変えようかと思っていたのだが、あっさりと許可が出てしまい、俺は神様に平身低頭して感謝の言葉を述べた。

これで二度目の人生を浪漫溢れるあの世界で、たつぷりと堪能することができる。それに能力を頼むついでに、ゲーム通りでは面白くないから、新たな舞台も用意して貰った。まさに至れり尽くせりだ！

『よし、早速だがお主を転生させてやろう。転生させる途中で希望した能力は全て付与させてやるからの』

「よろしくお願いします、神様！」

俺が元気よくそう答えたのと同時に、周囲がまばゆい光に包まれ、直後に軽い浮遊感を感じた　ホワイトアウト。

## ブログ（後書き）

つい勢いで書いてしまった作品で、不定期更新になるとは思いますが、これからこつこつと書いていくつもりなのでよろしく願います。

それでは、御意見や御感想をお待ちしています。

## 第一話：転生

「うわっ！目が見えない！？」

意識を取り戻して早々、俺は軽いパニック状態に陥っていた。なにしろ視界がぐんにやりと歪んでしまっていて、まともに周囲を見ることができないのだ。

「……つてあれ？」

パニックを起こして手を振り回していたら眼鏡に当たってしまい、眼鏡が落ちると同時に視力が回復したので、俺は呆けた声を出してしまった。俺の裸眼の視力はひどいもので、眼鏡をかけていないと日常生活に大いに支障を来たすレベルのはずだったのだが。

「あ、そうだそうだ。確か神様をお願いした能力のひとつに、身体能力を最強にして欲しいというのがあったなあ」

なんだ、自分で頼んだ能力なのに忘れた挙句、そのせいでパニックを起こすとは……いきなり締りの無い始まりで、早速俺は不安になってしまった。そもそもちゃんと転生できたのだろうか。

「ええと……おお、すごいな！」

眼鏡をかける必要のない人間が眼鏡をかけていたのだから、それは視界があんな悲惨なことになるわけで、俺は回復した視力で周囲を見渡した結果、感嘆の声をあげた。どうやら転生は成功したらしい。

先程までいた白一色の世界とは違い、今度は一面砂の世界だった。つまり砂漠だ。俺が望んだ　メタルサーガ　の世界はこんな感じがデフォルトのはずなので、転生は成功したのだろうとにらんだわけだ。

「しっかしすごいなあ、あの神様は。確かに身体能力最強にしてくれとは言ったが、視力だけでこんなによくするのは」

俺の目はまるで高性能双眼鏡のようになっており、意識を集中すれば何キロ先も見渡せるのだ。とはいえ、なにしろ周囲一帯は砂漠なので、現状では大した意味はなかったが。遙か遠く先の砂丘を細部まで観察することができて、何の意味も無い。

「おまけにここは砂漠で、お空にはさんと照りつける太陽もあるのに、そこまで暑さを感じないぞ」

その通りだった。せいぜい暖かいよりも上といったぐらいしか感じない。砂漠でこの程度の暑さしか感じないのは、やはり身体能力強化が影響しているのだろう。ずいぶんと便利な体になったものだ。きつと体力とか筋力とか、その他諸々もすごいことになっているに違いないので、いろいろと試してみなければならぬだろう。それに俺、確かあの時は調子に乗っていて、毒や病気が一切効かず不死ではないが不老にして欲しいとか、そういうことも付け加えていたような気がする。

「うん？」

足元から軽快なメロディーが鳴り響いたことで、ようやく俺は足元に落ちている物体に気づいた。緑をメインに暗褐色の迷彩が施さ

れた、俺の愛用のポーチだった。

「はて、あんな音を出す物を俺は持っていたかな……お、これは」

音の正体を確かめるべく拾い上げたポーチの中身をチェックしていたら、電子辞書より僅かに大きいぐらいの携帯情報端末を発見した。緑色に塗装されたそいつに、俺は見覚えがあった。

「BSコントローラーか。これはハンターの必需品だからな」

BSコントローラーとは、ハンターの活動を手助けする携帯情報端末だ。今までに踏破したことのある地形がオートマッピングされる地図機能をはじめとして、各種アイテムや戦車の管理機能、モンスターの詳細なデータバンク、電子メール、果てはダウンロードした音楽やゲームまで楽しめるといって、高性能多機能な携帯情報端末となっている。

「新着メールが一件……さっきのはこれの着信音だったのか」

トップに表示されていたので、すぐにそれを選択して、メールの中身を読んでみた。

「あ、神様からか」

内容は要約すると、無事に転生させたからあとは自由にすることになるので、とりあえず今いる場所から南へ進むようにという助言だった。読み終わると同時に勝手に消えてしまったが、ちゃんと記憶したので問題ない。

BSコントローラーのマップを確認してみると、マップ画面のほ



とんどは真つ黒のままで、右端の下の今いる場所のみが明らかになっている。八方位で言えば南東にいるわけだ。ここから南へ進むということは、画面から見て左へ直進すればいいんだな。

「よし、出発するか……つてその前に、さすがにこの装備じゃまずいよな」

なにしろ今の自分は、トラックに跳ね飛ばされる直前の姿だ。普通の私服だし、大した物も持っていない。これではさすがにモンスター の出現するこの世界では、いかにもまずいだろつ。

「さてさて、いい機会だからあの能力を試してみるか」

そうつぶやいた後、この世界で生きていくために必要な装備を身に付けた自分の姿をイメージして、それが実体化するように念じる……妙な白い光に包まれたりはしなかった。

「何にも前兆が無いと、一瞬成功したのか不安になるけど、どうやら成功したらしいな」

ニヤリと笑いながら、一瞬で特殊部隊員そのものの装備に包まれた体を見る。

砂漠迷彩の戦闘服にデザートブーツと、肘や膝を守るパッド。さらに戦闘服の上から拳銃やアサルトライフルの弾丸程度なら完全にストップできる防弾ベストを身につけている。ヘルメットは視界が狭まるのを嫌って装備しなかったが、どの道あの能力がちゃんと付与されているならば、たとえヘッドショットを喰らっても大丈夫のはずだ。防弾ベストは気休めというかお守りというか、まあそんな感じの気分で装備した。それにこの世界で生きている他の人間に見

られたとき、防弾ベストも着ていなかったら正気を疑われるかもしれないので、その対策という意味合いもある。

「いやはや、これもまたチートな能力だよな。日用品から食料はもちろん、兵器すらもイメージさえすればなんでも実体化できるって」

あの時は気分が高揚していたからなあ……さっきから独りごとばかりでいささかうんざりしてきたが、口に出すことで理解が深まるらしいので、まあいいだろう。

「とりあえず、次はやっぱり武器だな。まずはサイドアームから出してみるか」

俺は常々使いたいと思っていた自動拳銃を頭の中でイメージすると、それを実体化させた。すると俺の右手に一瞬で濃い黒で仕上げられた自動拳銃が握られた。

俺がサイドアームとして実体化させたのは、シグザウアーP228。世界中の治安維持組織で採用された傑作自動拳銃である、P226の小型短縮化モデルだ。小さくなって扱いやすくなったにも関わらず、九ミリパラベラム弾を一三発も弾倉に込められる。

ついでに俺が実体化させたP228には、銃本体上部にダットサイト、銃身下部にはフラッシュライトが取り付けられてあり、サプレッサー装着用のネジが切られていた。ダットサイトとは、覗くと赤い点が見え、それと標的を重ねて撃つと命中するという照準器具の一種だ。無い場合よりも素早く的確な照準が可能になる。フラッシュライトは銃に取り付けて使う強力なライトのこと。サプレッサーは銃声を抑制するアクセサリーで、サイレンサーと呼んだ方が一般的だろうか。使う機会があればサプレッサーは実体化させるつもりだ。

「無事に実体化できたみたいだが、ここはちゃんと作動するかどうか、射撃練習も兼ねて撃ってみるか」

俺は目の前に射撃練習用の円が描かれた木製の標的を実体化させると、まずは一〇メートルほど後ろに下がってから撃つことにした。

P228の弾倉を抜いて、ちゃんと弾丸が詰まっているかどうか確認した後、また弾倉をセットする。続いて銃の上部、つまりスライドを掴んで後ろに引いて、初弾を発射前の弾丸の待機場所である薬室に送り込んだ。安全装置も解除したので、これですべて射撃可能になったはずだ。

ちなみに俺が妙に手慣れているのは、実銃を撃ったのはこれが初めてではないからだ。わざわざグアムにまで観光も兼ねて行き、その射撃場で何種類かの銃を撃った経験がある。俺が今まで一度も実銃に触れて撃ったことが無ければ、いくら知識としては知っていても、もつと苦戦したに違いない。

それはともかく、俺は両手でしっかりと銃を保持して、引き金に指をかけた。ダットサイトの赤い点を標的の中心に照準する。視力が強化されているおかげで、バツチリと照準は決まった。狙いが定まったので、俺は滑らかに引き金を絞った。

乾いた銃声が鳴り響いて、スライドが勢いよく後ろに下がって金色の空薬莖を弾き出すと、今度は元に戻る際に次弾を弾倉から薬室に装填する。反動は驚くほど軽い。というよりも、グアムで撃ったときとは大違いだ。どうやら身体能力強化が、ここでも影響しているらしい。

「初弾命中！」

俺が放った初弾は、見事に円の中心を撃ち抜いていた。続けて今度は連続で引き金を絞って、弾倉が空になるまで速射したが、結果は全弾が初弾と同じ場所に命中。

「あの神様、ひょっとして身体能力に射撃の腕前とかも含めてたのかな」

空になった弾倉を捨て、P228を再装填した後、さらに一〇メートル下がって片手で連射しても結果は変わらなかった。

結局、五〇メートルの距離からでも結果は変わらなかったのも、俺は大満足した。拳銃でここまで当てられるのは異常だが、やはり神様が文字通り最強にしてくれたのだろう。ひょっとしたら、格闘方面も強化してくれているかもしれない。

「今度はメインアームも試してみるか！」

調子に乗った俺は、まず新たに実体化させて右太腿に装着したレツグホルスターにP228を収納すると、今度はメインアームのアサルトライフルを実体化させることにした。

次に実体化させたのは、日本の自衛隊が採用している89式小銃だ。小口径高速ライフル弾である五・五六ミリ弾を、三〇発まで弾倉に込められる。この89式小銃には、俺がダットサイトとフォアグリップ、さらにスリングを装着させている。フォアグリップは、アサルトライフルの前部に装着する追加のグリップで、より安定した射撃を可能にするアクセサリーだ。スリングは要するに銃を背負うための専用の紐のこと。

最初は米軍のM4カービンにでもしようかと思ったが、自衛隊が使っている89式小銃の方が、日本人である俺に合うかもしれないと思ったので変更にした。華奢な国産製品がこの砂漠でちゃんと作動するか不安だったが、自衛隊のイラク派遣でも問題無く使えていたようなので、思い切ったのだ。まあ、別にいくらでも実体化できるのだから、これから機会はいくらでもあるだろう。

先程と同じく標的を用意すると、まず一〇〇メートルからセミオートで撃った。セミオートは半自動、要するに拳銃と同じく引き金を引く度に一発ずつ発射される形式のことで、面白いように標的の中心を五・五六ミリ弾が撃ち抜いていった。なので今度は三点バースト、一度引き金を引くと三発ずつ発射される形式でも撃ってみたが、相変わらずの全弾命中。

「本当に神様はチートだなあ」

思い切って三〇〇メートルから走り回りながらフルオート、つまり機関銃のように引き金を引いている間は弾切れまで撃ち続ける形式で撃ちまくったが、やっぱり全弾命中してしまったので俺はビックリだ。

付け加えるなら、高性能だがクソ重い防弾ベストと銃器を身につけているのに、まったく疲れず汗も大してかかずに高速で走りまわれたことにも驚愕した。やはり俺は人間ではないレベルにまで身体能力が強化されてしまったのだろう。でもまあ、この世界ではこれぐらい無いと、長生きできないよな。

射撃練習はここでお終いにして、俺は89式小銃を背負う前に、大量のマガジンパウチが設けられたタクティカルベストを実体化さ

せて、防弾ベストの上から着込んだ。マガジンパウチには89式小銃とP228の予備弾倉を詰め込んでおく。さらに腰回りにも予備のマガジンパウチを実体化させて装備した。

「そろそろ出発しようかな」

スポーツドリンクの詰まった軍用水筒を実体化させ、その中身を飲んで一息ついた俺は、いい加減に出発しようかと思い始めていた。装備も整えて射撃練習もしたことだし、あとは神様の助言に従って南へ進もう。

「でもなあ、いくら身体能力強化されてると言っても、ここを延々と歩くのは嫌だよな……主に気分の問題で」

見渡す限りの砂漠を見ると、げっそりとしてしまいが、俺はポーチを拾うと歩き出そうとした。が、うっかりポーチのチャックを閉めていなかったせいで、中に入っていたビニール袋に包まれた物が落ちてしまった。

「チツ……そうだ、乗物を実体化させればいいじゃん！」

自分の失態に舌打ちしながらビニール袋を拾い上げた俺だが、その中に入っていた転生前に俺が購入し、ある意味でこうなる原因となった陸軍兵器図鑑を見て、思わず叫んでしまった。

「そうと決まれば早速、何を出すか決めなくては」

陸軍兵器図鑑を開いて、どんな車両を出そうか検討を開始する。

最初はいきなり強力な主力戦車を出そうと思ったが、この世界で

は本物の戦車を手に入れるのは難しいというのが常識だったことを思い出し、グレードダウンすることにした。まだハンターとして登録もしていないのに、いきなり主力戦車に乗って現れたら、余計なトラブルを招きそうだからな。ただあんまり弱いのにすると、それはそれで困るから、悩みどころだ。

少し考えた後、俺は装輪装甲車、要するにタイヤで走る装甲車にすることにした。さらに装輪装甲車の中でも、それなりに強力な火炮を搭載したモデルを検索条件に設定。その結果として、俺はある装輪装甲車を選び抜いた。

ルーイカット 南アフリカで偵察や火力支援を主たる任務として開発された装輪装甲車。南アフリカの広大なサバンナを高機動で走破すべく、八輪のコンバットタイヤと地雷防御が備えられ、タイヤのひとつやふたつ吹き飛ばされても自力走行可能というタフネス。当初は高初速で長砲身の六二口径七六ミリ戦車砲を搭載していたが、その後はより強力な一〇五ミリ砲に換装された改良モデルが出ている。戦車並みの射撃管制装置を搭載し、砲塔側面に四連装煙幕弾発射器を備えていて、さらに副武装として七・六二ミリ機関銃を二丁備えている。

実は同じ種類のイタリアのチェンタウロ戦闘偵察車とどちらにしようか迷ったのだが、緑豊かで幹線道路の整備されたイタリアではなく、道なき道を進むこの世界では過酷な南アフリカのサバンナを高速で走り回るルーイカットの方が適任だと判断し、ルーイカットに決めたという経緯がある。

俺が目の前に実体化させたルーイカットは、一〇五ミリ砲搭載の改良モデルだ。それを俺がさらにあれこれこの世界に合わせて改良してしまっている。

「うーん……プレイしているときはあまり意識しなかったが、思ったよりすごいなこの世界の技術は」

ほぼ駆逐戦車のようなルイカットだが、あくまで装甲車なので、まともに戦車クラスの火砲と撃ちあたらひとまりもない。というわけで、俺はまず最大の弱点である装甲の強化を図った。エンジンをより強力なものに換装し、装甲タイルを可能な限り貼りつけた。装甲タイトルとは要するに増加装甲で、ゲーム中では戦車の基本的なHPの役割を担っていたが、リアルなこの世界でもその役割は果たしてくれるだろう。かなり貼りつけたので、多少の銃砲撃はものともしないはずだ。

続いてゲーム中ではCユニットと呼ばれている、戦車の頭脳であるコンピュータも各種センサーとともに強化した。具体的な大きい変化は、音声での命令を可能にして、俺は大まかな指示を出すだけでよいことにした。さらにCユニットが強化されたおかげで、副武装の七・六ミリ機関銃がセンサーと連動して動きリモコン式になった。

その他の細かい点も改修を施したので、モンスターが跋扈するこの世界でも十分に通用する車両になったはずだ。

「どれどれ、乗り心地はどうか」

俺は喜び勇んで自前の装甲車に乗り込んだが、車内はちゃっかりとクーラーが効いており、本来なら四人乗りが俺だけなので十分なスペースが確保されていて、快適なことこの上なかった。

「これで準備万端だな」



俺はルークカットの車長席におさまって、にんまりとした。

「ルークカット、南へ前進！」

簡潔な音声命令を伝えると、了解を伝えるグリーンのランプが点灯し、ルークカットが一際エンジン音を高鳴らせると八輪駆動で力強い進撃を始めた。

俺の旅はこれからだ　遅しいエンジン音と胸の高鳴りがシンク口する中、俺は旅のはじまりを実感したのだった。

## 第一話：転生（後書き）

今回は準備だけで終わってしまいましたが、次回ははじめて徹平が街へ入り、ハンター登録したりする予定です。

ちなみに原作のキャラや街は基本的には出ず、こちらではアイテムやモンスターの設定といったものだけを利用するつもりです。

それでは、御意見や御感想をお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1883o/>

---

とある軍オタの鋼鉄戦記

2010年10月8日12時46分発行